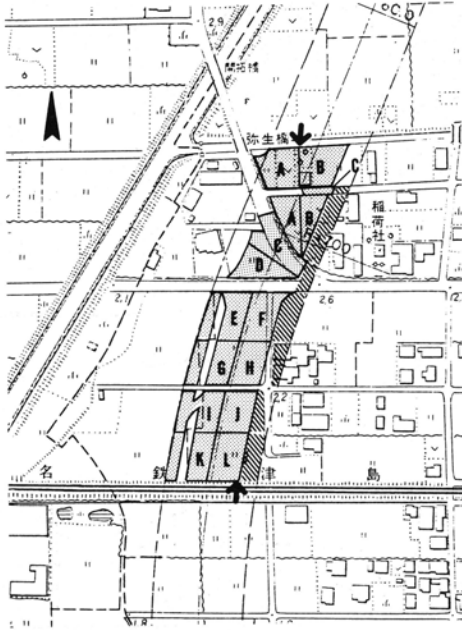


大 湊 遺 跡

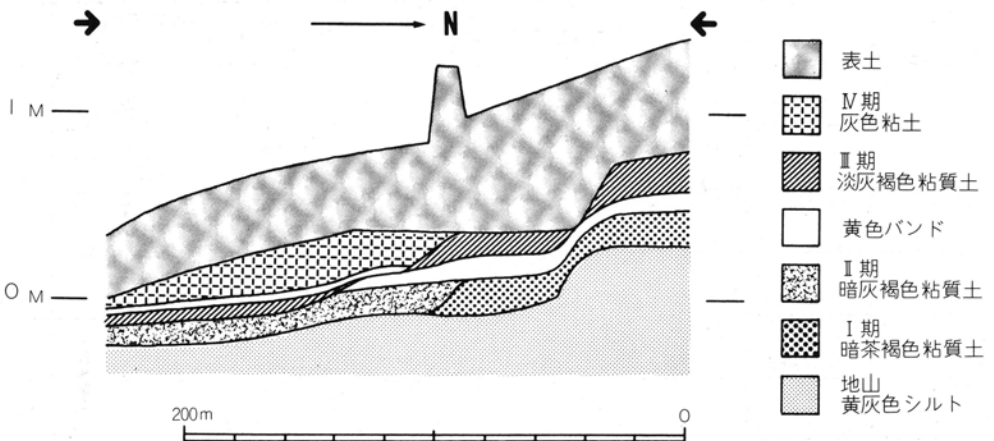


59年度発掘区
60年度発掘区
発掘区位置図 1 : 5000

大湊遺跡は、ほぼ東西にのびる砂堆上に立地している。北側は幅50～60mの大きな谷地形となり、南側は緩やかに傾斜した地形で、南にいくに従い湿地様の状態を呈していたと考えられる。また西側については、北側の谷が鍵状に折れて南下していく。

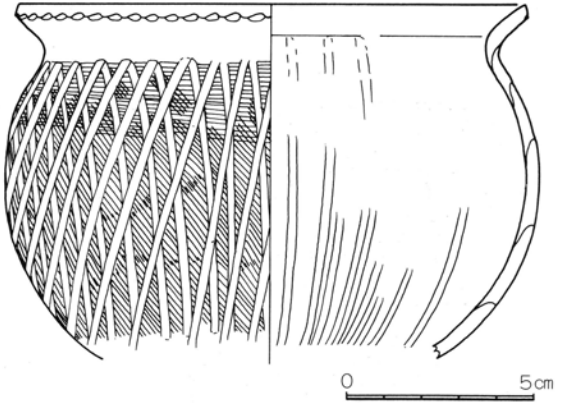
本年度の調査は、水路及び道路を境界にA区～L区の12区に分割して行なわれ、一部を除き、環状2号線内における発掘は本年度をもって終了した。調査面積は8,427㎡。

先年度までの調査によって、大湊遺跡はⅠ期—弥生時代中期、Ⅱ期—古墳時代後期～奈良時代、Ⅲ期—中世以降という三期に区分されていた。しかし、今年度の調査の結果、Ⅱ期がさらに二時期に分かれることが明らかとなり、Ⅰ期—弥生時代、Ⅱ期—古墳時代後期、Ⅲ期—平安時代、Ⅳ期—鎌倉時代という新たな時期区分が設定されることとなった。

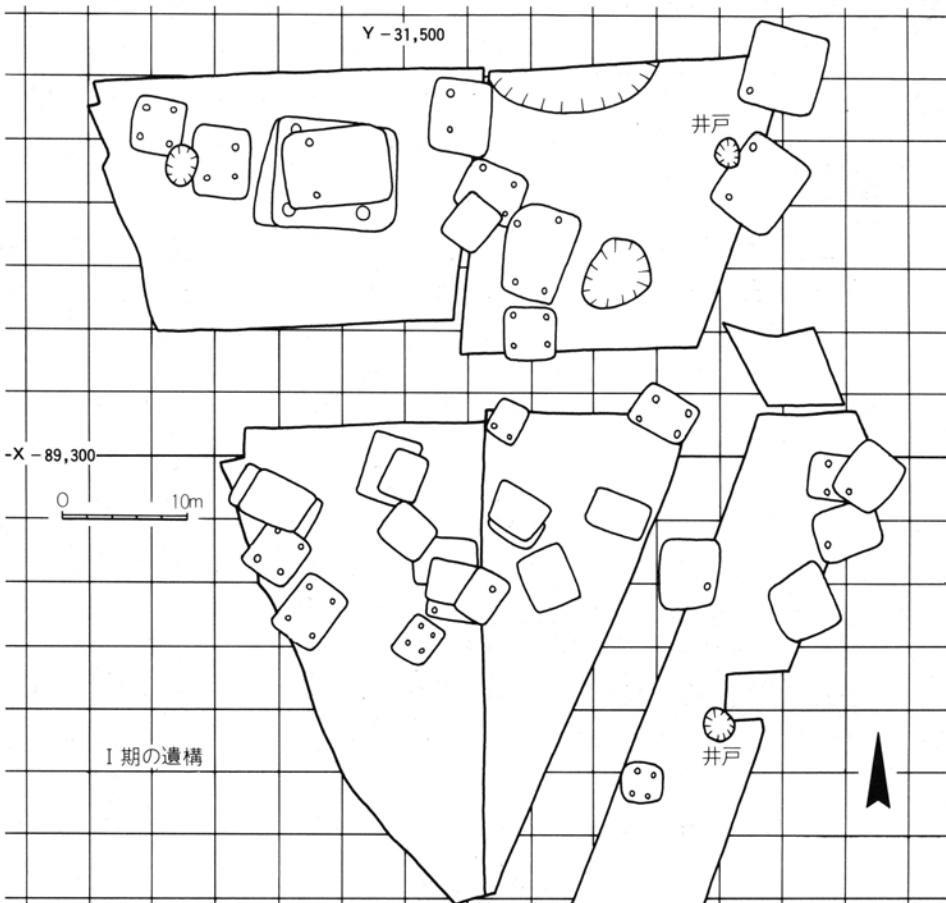


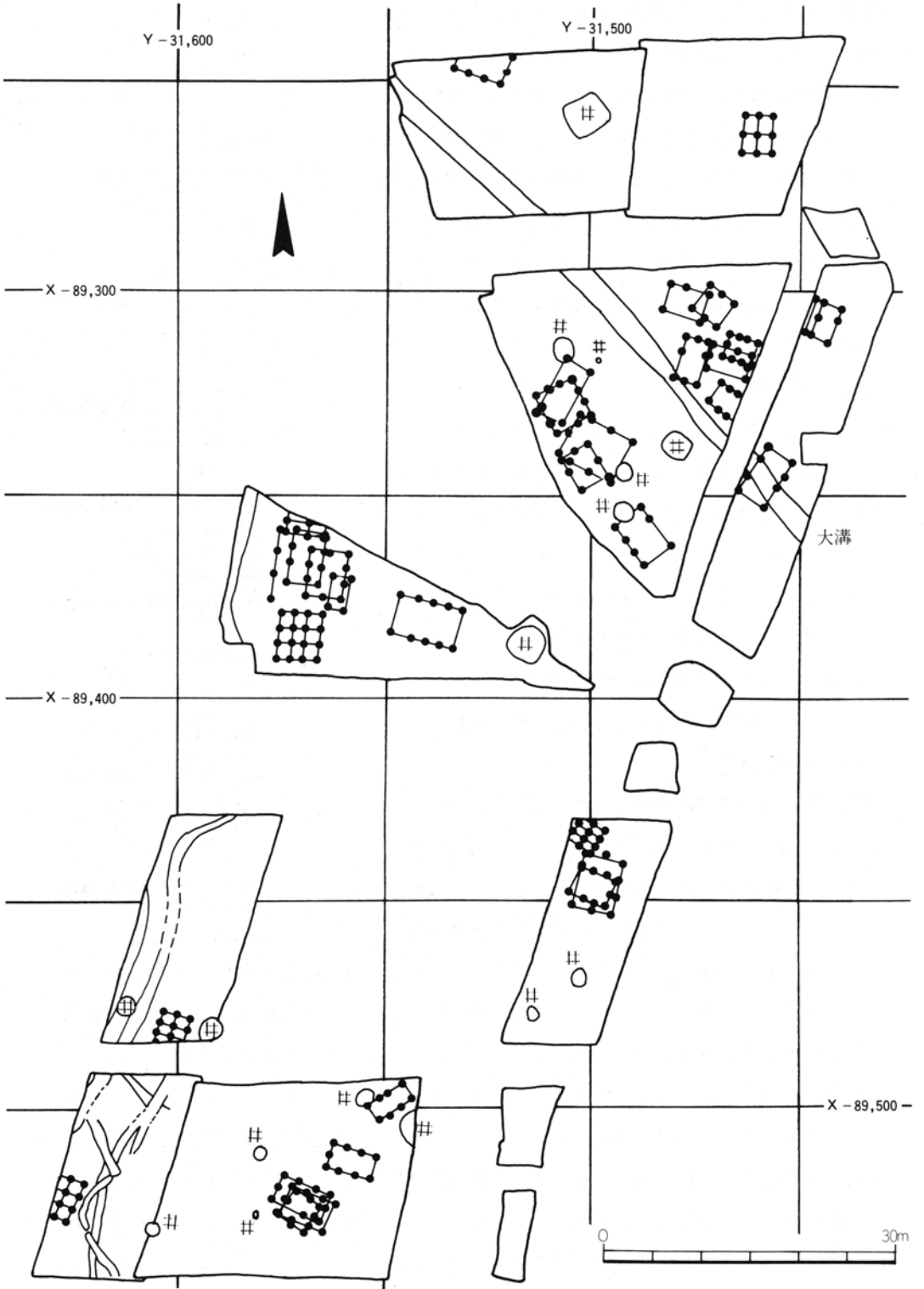
大湊遺跡層序模式図

I 期 I期は弥生時代を中心とする時期である。先年度までの調査によって明らかにされたように、大渚遺跡では弥生時代でも高蔵式期にのみ遺構が形成されている。ただ、集落を囲む溝として想定されていた59A区SD03については、遺構のあり方からII期に属するものと思われる。遺構としては、竪穴住居跡30軒、井戸1基が新たに検出されている。A区北側では自然堤と思われる地山の高まりがあり、9m×8.6mを測る方形の大型住居が検出されており、A区を中心とした集落の展開がみられる。また集落の南限は、ほぼA区の南辺になるであろう。(宮腰健司)



I期60ASK 72





大淵遺跡Ⅱ-Ⅱ期遺構配置図

Ⅱ期 Ⅱ期は古墳時代後期を中心とする時期で、遺構としては、掘立柱建物・井戸・溝などが認められる。掘立柱建物は4棟検出された。これらの建物は、西へ30度振る方向に限定されており、一応の統一性を考えることができる。なお、建物は全て掘立柱によるもので、竪穴式住居跡は見られない。また、これらの建物に並行する形で、大溝が展開している。一方、調査区南端部は、井戸が群集する空間が認められる。ここでは建物群は未検出である。

Ⅲ期 Ⅲ期は平安時代を中心とする時期で、遺構としては、掘立柱建物・井戸・溝などが認められる。掘立柱建物は26棟検出されており、本遺跡の最盛期として考えられる。建物の方向は、東へ30度・15度・10度と、ほぼ3系統に分類され、時期差を想定できる。これらの建物群は、同系統内でのある程度のまとまりを推定させる分布状況を示している。しかし、これらを区画する明確な施設は検出されていない。なお、建物分布域は、Ⅱ期と比較して拡大している傾向を示す。

Ⅳ期 Ⅳ期は鎌倉時代を中心とする時期で、遺構としては、掘立柱建物・井戸・方形土壇・溝などが認められる。掘立柱建物は12棟検出された。これらの建物は、調査区のほぼ全域で認められた方格地割り中に、6棟ずつ2群に分かれて分布している。一方、方形土壇は、隅丸正方形を呈する形状が一般的で、調査区南部に群集する傾向を示している。この分布域は、60H区に見られる弧状に展開する溝を北限としているものと思われ、建物群とは分布空間を異にする。

まとめ 大淵遺跡は、本年度で環状2号線関係調査のほぼ終了を迎え、いくつかの貴重なデータを入手することができた。その中でも、最もこの遺跡を特色付けるのは、Ⅲ期掘立柱建物であろう。これらは、調査区域が遺跡の外縁に所在すると考えられるため、実体を十分に理解できない状況ではあるが、整地に伴う形で展開すること、方位に統一性を有することなどから、若干の注意を必要とするであろう。

(池本正明)

